

【イルガチェフェ訪問】2月5日

○朝7時、さあ！いよいよ今回の一番の目的地イルガチェフェへ出発！

快晴の空の下、チャーターしたタクシーは、ハイウェイを快調に走り出す。出発前に朝食を取れなかったので、アディスから45kmのレイク・ハラの町「デブレ・ゼイド」で美味しいフレンチ・トーストをいただく。

そこから「レイク・ズワイ」、「レイク・ランガノ」、「レイク・アビアッタ」、「シャラ・レイク」などを左右に見ながらひたすら南下する。

途中ラス・タファリアン達が住む「シャシャメネ」や観光地で知られる「アルバミンチ」などを通過して、ディラの町に13時過ぎに辿り着いた。ここで昼食をとったが、かなり空腹だったので、ついで二人分とサラダを注文してしまったら、なんと食べきれないほどの量が運ばれてきてしまった。エチオピアでは一人分でしっかり二人分です。

○ハイウェイの左右の景色は、殆ど木が生えていない砂漠のような埃っぽい景色が続く。水源に人や動物達が集まり、馬車やロバで水を入れたドラム缶やポリタンクを運ぶ人たちが多く行き交う。子供達も手に手に小型のポリタンクを持ち、水を運んでいる。彼らの一生は、この様な水を確保する生活で終始するのだろう・・・と容易に想像できる。

○「アルバミンチ」を過ぎたころから、辺りの様子が砂漠地帯から緑多いトロピカル風に変わってきた。エンセーテ(似非バナナ)やマンゴー、またコーヒーの木々などが豊かに群生する、その中に藁葺きマル屋根の「ハット」と呼ばれる粗末な家々が見える。次々と、大きく変化する景色に驚きの旅、7時間もあっという間に過ぎた感じだった。

○14時50分にイルガチェフェのベスト・ホテル「レスワン・ホテル」に到着。庭にはカラフルな花が咲き乱れ、シャワーも付いていた。でも、3年前にようやく、電気が通ったとのこと。

「レイク・ズワイ」、「レイク・ランガノ」、「レイク・アビアッタ」、「シャラ・レイク」等の風景		食べ切れません
水を運ぶ子供達		緑豊かな風景/果物の木々
	レスワンホテル	

【イルガチェフェ訪問 - 自然栽培の森林コーヒー - 】2月5日

○オロミヤ・ユニオン代表・タデッセ氏から紹介されたイルガチェフェ責任者・バイエネ氏と面会。農民達から慕われている、とても真面目な青年である。早速、氏の案内で、コーヒーの山に入る。

山道を登る途中、対岸に見える山々の斜面一面に群生するコーヒー森林に感動する。HAT の提供するモカ・コーヒーは、本当に、自然栽培の森林コーヒー、有機栽培であることが実感できた。

車の音を聞きつけ、辺りの農民達、特に子供達が家から飛び出してくる。口々に「ファンチ（外国人）！ ファンチ！」と叫びながら車の後を追ってきた。この地を訪れた最初の日本人の女性であるとのこと。

○ユニオン（組合）が管理するウォッシング施設と乾燥棚が広がる斜面に案内される。ミュール（馬とロバをかけ合せた動物）がのんびりと草を食んでいる。回りにコーヒーの木々やエンセーテが緑濃く群生している、その一角に、まぶしい太陽が降り注ぐ静寂な台地に、乾燥棚が整然と並んでいた。シーズン・オフなので洗浄施設は稼動していないが、洗浄システムを丁寧に説明され、G1, G2 などのウォッシュド・コーヒーが出来る過程を興味深く紹介してくれた。洗浄後の水は周辺地域の環境を考慮し、自然乾燥するようプールされており、また、豆皮は肥料として使われるとのことで、傍にうずたかく積上げられていた。

○20人ぐらいの子供達が集ってきて、彼らと一緒に彼等が通う学校へ。政府とユニオンにより建てられた教室が併設されていたが、いずれも平屋で教室数が5~6室だろうか、ここで700家族の児童達が勉強するため、時間帯でシフト（午前組・午後組）しながら授業帯が進められている。

○農民一家族の子供数は、平均8~9人とのこと。水も電気もない粗末で小さな住まいにどうやって住んでいるのだろうか？ 時に家畜も一緒の場合もあるとのことで、ちょっと想像し難いのだが、家（小屋）の中を拝見すると、それなりに合理的に出来ている。

女の子達が小さいプラスチック容器を持って水場まで山を下る光景を多々目にした。コーヒー農民は生涯山に住んでコーヒーを生育する。

さらに、日本の町会役員のような人達が会議している場に遭遇したりした。私達から見ると余りにも粗末な生活ぶりだが、豊かな自然の中で近隣の人達と苦楽を分かち合いながら、ある種の共同生活のような暮らしさは、もしかしたら私達より豊かなかも知れない。

バイエネ氏の案内で農園を視察	大歓迎してくれました。	銃を持つ警官も一緒にになって。
		
学校の建物	一緒にについて来る人懐っこい子供達	家の中での生活
		

組合の役員達の会議	ミュールが草を食べている	見渡す限りコーヒー森林の山々
乾燥棚	乾燥棚	コーヒー森林を背景に乾燥棚
コーヒー豆の洗浄施設	美味しい「イルガチエフェ・コーヒー」を育てている農民の一人クテ・ゲドさん。 一家族で2ヘクタールの土地で有機栽培ガーデンコーヒーを生産する。	枯れ木を運ぶ女性と子供達
子供達	家の前で	小さな子供も働く

【イルガチェフェ訪問】(2月6日)

○午前8時より同じ山にある、別のコーヒー組合を訪問。そこでも2ヶ所の学校とヘルススポット(保健所)を視察した。一人の看護婦が常住しているが、未だ新しい施設だからであろうか、どうも余り利用されている様子が見られない。ベッドは一台のみ。きっと農民達は健康で施設を利用する必要がないのでしょうか？



○山を降り、一路ウォンド・ゲネットまで、4時間のドライブ。途中アルバミンチで昼食。

○アルバミンチを過ぎて間もなく、舗装道路からオフロードに出て、国内で海拔が一番低い地域に向かう。道がなだらかに下り、すり鉢状の底辺に向かう感じである。舗装されていない埃っぽいデコボコ道をひたすら進んだ。

到着した町は、ウォンド・ゲネットという観光地。町の少し高台に位置する政府系のコテージ風ホテルは、木々に囲まれ、温泉の小川が敷地内を走る気持ちの良い所で、すぐ近くには専用の温泉プールや打たれ湯の施設が設けられていた。

2月7日

○温泉プールは温度差のある二槽で、打たれ湯は切立った所からかなりの水量が流れ落ちてくる。いずれも約40℃の豊かな自然の温泉であった。普段はヨーロッパ人観光客が結構利用するようだが、朝早くからせいで利用者は2~3人。



【HAT よりサッカーボールを贈呈】(2月7日)

○午前8時、ウォンド・ゲネットを出発。一路アディス市へ。昼には市内のギオン・ホテルに帰着。荷物を置いてすぐ外出。イルガッчエフェの3つの学校の子供達にサッカーボールを各10個贈るため、アディス市内のスポーツ用品店を3軒まわり、ようやく30個のボールと空気入れポンプを購入。そのままタデッセ氏のオフィスにボールを持参し、イルガッчエフェへの贈呈を依頼した。

○日本に帰国直後、タデッセ氏からはイルガッчエフェの学校へ贈呈した旨のメール、そしてバイエネ氏からは、子供達が大変喜んでいる様子や、大人や教師も一緒にになってボールを楽しそうにプレーしている写真を添えてメールが届いた。

<p>「サッカーボールを受取りました。 これから子供達に届けます。」 (右から3人目がタデッセ代表)</p> 	<p>バイエネ氏より届けられた写真 大人も子供も楽しくサッカー</p> 	<p>「HAT の皆さんありがとう」 大喜びの子供達。</p> 